
転生、そして・・・

桐生 セイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生、そして・・・

【Zコード】

Z2248Z

【作者名】

桐生 セイジ

【あらすじ】

ありがちでベタベタな転生物の習作的な何かです。
剣あり、魔法ありありがちな作品にしたいと思つてます。

処女作で拙い文章かとは思いますがお読みいただければ幸いです。

0・0 はじまつ的な何か（前書き）

昔作ったゲーム用のプロットをそのまま焼きなおしてみた。類似している作品が無いと良いなと願う次第。。。調べた限りは無かつたが。。。）

0・0 はじまり的な何か

最初に虚無があった

最初に神が生まれた

神は言われた「大地よあれ」

神は言われた「空よあれ」

神は言われた「海よあれ」

そして最後に神は言われた「時よあれ」

そして・・・・時は動き出す

どうやら、この世界の神は怠惰だったようだ。

どうやら私は死んでしまつたらしい。

らしさ」というのは、私には死んだ記憶がないからだ。
いや、記憶が無いという事は実は植物状態で死んではいないのかも

しない。

しかし、私がどうこう状態なのかはどうでもいい話である。

問題なのは、私には名前をはじめとして”大半の”記憶がないことだ。

あれ？死んだら脳が動かないから記憶は無いのが普通なのか？

まあ、だからといって今のところ不都合がある訳ではない。

少なくとも私は動けないし、すぐに何等かの不都合は生じないだろう・・・

『眠い・・・・』

そして、私はなぜか無性に眠くなつてきた。

なんだ、これは？

選択肢？

『まあ・・・いいや・・・』

私の意識は深い眠りへと落ちていった。

0・0 はじまり的何か（後書き）

実際、ここまでは独創性のかけらもないと思つてゐる。
今後の展開に期待したい。。。。

0・1 独り言的な何か（前書き）

表現つて難しい。。。。

0・1 独り言的な何か

私は暗い所でなにやら温かくものに包まれている。
まあ、それはどうでも良い事だったりするのだが、では置いておこう。

幸いな事に考える時間だけは沢山あるようなので、この少し私の
いる世界について整理がてら説明しておこうと思いつ。

私の今居る世界は、この世界では神々の栄光の世界と呼ばれている。
簡単に言つてしまえば異世界だ。

異世界と言つても、私が前に生きていた世界と根本的な物理法則などは変わらないらしい。

幸いな事に、記憶喪失とはいえ学問的な事は覚えているのでこの世
界でも何とかやっていけそうだ。

あつと、忘れてはいけないのがこの世界にはじめから魔法があるら
しい。

まあ、魔法の詳細についてはおこやつていく事にしよう。

ここで一番説明しなければいけないのは、なぜ私がここまで知つて
いるかとこつ点だと思つ。

どうやら、この世界には、某ゲームのようにスキル的なものやパラ
メーター的なものがあり、私は先天的なスキルを幾つか保持してい

る。

現在持つて いるスキルで持つて いる事がわから るものは、
転生者の大半が持つて いる「記憶を受け継ぐ者」
思考能力を引き上げる「覚醒」
そして先天的に知識を持つて いる「賢者」
この3つだ。

やれやれ、覚醒があるとはい え生まれる前の胎児にとつてはかなり
の負担に成つて いるようだ。

今回はここひで寝るとする・・・か・・・・

0・3 続独り言的な何か

やあ、久しぶりだね

私の方は相変わらずの状態だよ。

今回は、前回後回しにした魔法の話をしようか。

この世界の魔法はどうやら『世界を騙す』事により効果を発生させるらしい。

突然『世界を騙す』と言われてもわかりにくいやつ。

人がそうだと信じ込めばそれが実現されると表現すればわかりやすいだろうか？

例をあげるならば・・・ そうだな・・・ 一般人を宮廷魔法使いにしたら『宮廷魔法使いならば凄い魔法が使えるだろう』という期待があるから、『本人に魔法を使用するイメージがあれば』凄い魔法が使えるといった感じかな？

私もあくまで知識として知っているだけだから、上手い例えが出てこないなあ・・・

まあ、本人のイメージの強さ次第で魔法が使えるようになるから、あまり意味があるとは思えないけどね。

とりあえず、上手い例えは後日への課題という事にしようか。

さて、そろそろ時間のよつだね。

私はそろそろ寝る事にするよ。

では、また会おう。

1時間後、とある辺境の町で1人の子供が生まれた。

その子供が今後どのように成長するのか、この時点では知る者はいない。。

1・0 誕生的な何か

やあ、また会ったね。

うん、まずは現状を説明しよう。

とりあえず、私は生まれた。

当然の如く0歳児として。

当然の事ながら、自分では動けないし、喋れない。

つまりは、何も出来ないに等しい訳だ。

当然の事ながら、見えるものは観察し、聞けるものは聞き情報収集
はしている。

だが、所詮は0歳児の私の回りにあるものなどたがしれている。

魔法を使って多少は感覚を強化してみると云々、当面は出来る事は
無さそうだな・・・

「・・・アダムは寝ているのかい?」

「さつき寝たばかりですわ」

「や・・・父が帰ってきたようだ。」

せつかくだから両親について簡単に説明しよう。

父親は一応騎士らしい。

まあ、産まれたばかりの乳飲み子の前で、わざわざひけらかしたりもしないだろう。

母親はこれといって仕事をしている訳では無いようだ。

私が産まれたから一時的に子育てに専念しているだけかもしけないが・・・

まあ、美人はある。

美人に母乳を飲ませて貰っている訳だからある意味ラッキーなのだろ？。

母親ではあるが・・・

さて、そろそろ疲れたから失礼するよ。

1・1 日常的な何か（前書き）

十四はおやすみれふ…

1・1 日常的な何か

やあ、元気だつたかい？

さて、とりあえず前回より半年たつた訳だが、ある程度わかつた事を説明しようか。

今は帝国歴13年

つまり建国から13年しかたっていないうち。

そして、魔法に関してわかつた事は一度に一つしか使えないらしい。

と言いつつも私は「幻影」と「実体化」の魔法を常時起動しているから、恐らく一般魔法（一般的に使われる魔法だからこう呼ぶ事にした）で適応されるルールだろう。

ああ、あと父の名前がアーウィン・ロレンスで年齢が22歳、母がリーナ・ロレンスで18歳らしい。

家があるのは帝都である。

といつあえずこんなものだれうか？

まあ、こんなもので今回も失礼するよ。

1・1 日常的な何か（後書き）

早く学園編まで入りたい…

1・2 発見的な何か

やあ、元気だったかい？

前回から3ヶ月ぶり、つまり私は7ヶ月になつた訳だ。

そして、色々考えて気付いたんだ。

私の日頃いる部屋には魔法を使った照明器具が設置されているが、それは入口付近のスイッチらしきものによつて管理されているらしい。

まあ、それだけならびつといつ事は無いんだが、私は気付いたんだ。

どうやら、この世界の魔法には距離が関係ない。

それがどういう事かと呟つと、私が生み出した魔法を使えば私はベットに寝ながらにして『外の世界を旅出来る』といつ事だ。

つまり、私が遠隔で人の幻影を生み出し、それに実体として活動出来るものを付与する事で、平たく言えば幽体離脱したものに実体がある状態を生み出す事が出来るといつ事だ。

そして、魔法を使ってモンスターを倒せば経験値が手に入る・・・
これは基本中の基本だ。

上手くいけばチート級の成長が出来るのではないだろうか？

これは試してみる事にしよう

1・3はじまり？的な何か

やあ、久しぶりだね。

といつても前回からほとんど時間がたつてない訳だが・・・

とつあえず、試してみよう。

『幻影』・・・よし上手く発動したよ！

ベッドの横にぼんやりとした白い固まりが見えている。

あー・・・どのよつな姿にするか指定しないとダメか。

とつあえず、私が成長して15歳になつた位にしておいつ。

そう決めた途端白い固まりは銀髪の美少女へと変わっていく。

ああ、説明してなかつたかもしれないが、私は自分自身が産まれる前に自分を対象に『幻影』の魔法を掛けた上で『実体化』の魔法を掛けている。

つまり、私は本当は女なのだ。

まあ、ここではあまり関係無い話なので実験の方を進めよう。

次の段階として『実体化』を掛ける。

そして自分自身を抱き上げる。

成功だ

とりあえずベッドへと戻し魔法を解除する。

これで成長を待たなくとも冒険が出来る。

あ、何か空間把握系の魔法を使わないと状況がわからないぞ・・・

『遠視』を使えば行けるか？

その辺は実地で試す事にしよう。

モンスターのドロップは、異次元にでも部屋を作つて保管すれば良いか。

使えば使うだけステータスは上がるよつだし、がんばりつ。

とつあえず、軽く探索に行く事にし、家の外に魔法をさせむ。

『遠視』を幻影の目の部分を起點として発動する事で視野を確保して、帝都内を散策してみる事にする。

私が済む家は住宅地にあるらしい、周辺にはほとんど人がいない。

まあ、昼だしな・・・

とりあえず、賑やかな方に向かう事にしよう

1・3はじまりー的な何か（後書き）

ちよつとは進んだかな・・・？

1・4 外出的な何か

私はにぎやかな方へ歩を進めた。

どうやら、家の前の通りは大通りに続いているらしい。

(ほつ・・・結構広い通りだ。)

恐らく帝都でも大きい通りに入るのだろう、店が立ち並ぶ通りへ出了た。

(あれは・・・武器屋か? こっちは宿屋っぽいな)

それぞれ建物の入り口に剣やベットをあしらったエンブレムが掲げられている。

おそらくそれが各店が何を扱う店であるかを示しているのだろう。

(しかし・・・いまの状態では行く必要もないか。)

そう、なにせ今はあくまでも魔法でそここりみよつて見せかけているだけであり、武器や防具は装備出来ないし、食事や睡眠も不要ない状態なのだ。

(しかし、人が多いな・・・とひあえず外にでて魔法でも試すか。)

人が多いと魔法が見破られて面倒な事になるかも知れない、そう考えとりあえず外に出よつとした。

が、しかし・・・

(門はどうだ・・・)

初めて外にでた私には門の位置などわかるはずがなかつた。

(あそこで聞いてみるか)

私は目に付いた露店で聞いてみる事にした。

「あの、すみません」

「あいよ、お譲りやん何が欲しいんだい?」

「あ、いえ、買い物じゃなくて・・・ちょっと道をお聞きしたいんですけど。」

「なんだ、密じゃないのか。で、どこに行きたいんだい?」

「えつと、門の場所なんですか?」

「へ? 何を聞こ出すのかと思えば、門はこの道をまっすぐ行けばあるぜ。」

「あ、そりなんですか。ありがとうございます。」

「なに、良いつて事よ。機会があつたらひづり買っておくれ

結構気の良いおつりやんある・・・頭が禿げあがり光を反射してい
るのを除けばあるが・・・

1・4 外出的な何か（後書き）

1回の文章量を増やすと、書いたのを即投稿するのはどうが良いんだろう・・・

即投稿の方がモチベーションを維持出来るかな？

1・5 捕獲的な何か

私は店の禿おやじに言われた通りを門を目指して歩き始めた。

そして私は見つけてしまった・・・

(猫耳・・・?)

そう、通りには亜人と思しき猫耳に猫尻尾の人々があるいて・・・いや、良く見れば尖った耳だつたり、毛むくじやらだつたりする人(?)が思い思いに歩いている。

(流石異世界だなあ・・・)

などと思いながらも足は止めない。

そのまま歩く事20分ほど・・・

ようやく門が見えてきた。

(大きい・・・)

そう、門は幅10メートル高さ15メートルほどだろうか?
典型的なアーチ型の門である。

まあ、門と言つからには当然見張りの兵士もいるわけだが・・・

(親父か・・・)

そう、門の横の詰め所の前に向やうがに指示を出してこむ父親が居た。

ばれる事は無いだろ!つとまのまま歩を進める。

門を出よつとした瞬間

「おー、セーとひよつと待て」

父親に呼び止められてしまつた。

「ひや、ひやい、なんでひょうか」

囁んだ・・全力で囁んだ。

「ハリで詰すのもなんだからひよつと奥まで来てもらおつか」

「え?」

「良こから来こ」

腕を掴まれ強引に詰め所の中に引っ張りこまれてしまつ。

詰所の中は・・まあ、男所帯ならではの乱雑をぢかぢかもした
感じだ。

「とつあえず、その辺の椅子こでも座れ」

父は扉を閉め扉が開かないよつてあるつか扉に体重を預けている。

(「の状態では逃げ出しうがないか。」)

当然、魔法の解除をすれば逃げる事は出来るが、何が起きるのかに期待しつつ私は言われた通り椅子に座る事にした。

1・6 サブタイトルと内容の関連つて無いよね的な何か

「さて、貴様は何者た?」

腕を組みつついきなり核心を問い合わせられた。

「わざわざ、俺の家族の姿をして田の前に現れたのだから理由が無いなんて言つてくれるなよ?」

(するどいな・・・)

「なぜ、気付いたんですか?」

「なぜ?おまえさんには生きている気配が全くないからな。気付かない方が難しいだろ」

「流石お父様ですね

「は・・・え?・・・お父様って・・・俺がか?」

「え? 気付いたから呼び止めだんじゃ・・・」

「まさか、アダムなのか?」

「正確には使い魔みたいなものですが・・・」

「マジか・・・ちょっと待つわ」

父はそつまつと慌てて外に出て向かいの方と話していく。

待つこと数分

「よし、帰るぞ」

「帰るつてどうへ・・・」

「家に決まってるだろ。話しあは帰つてからだ。」

「うして私の初めての冒険は一時間弱で幕を閉じたのである。

1・7 もうサブタイトルを付けないで数字だけで良いんじゃないかな的な何か

お気に入りが6件・・・
そなたに感謝を

1・7 もうサブタイトルを付けないで数字だけで良いんじゃないかな何か

そうして、先ほどたどった道の利を父の後ろを付いていく事になつたのだ。

歩く事30分よひやく家にたどり着く。

「ただいま」

父が扉を開けて入つていぐ・・・

(後ろについていけばいいのか?)

私はそのまま付いていく事にした。

「おかえりなさい・・・で、後ろに面るのはどちら様?」

出てきた母は険悪な空気を纏つてゐる。

「えーっとだなあ、どう説明したらいいのか・・・

「お父様とりあえず、奥の部屋へ

「ああ、やうだな」

「お父様・・・・・・

母が凄い形相で睨んで・・・怖い怖い

「コトア、ほり、ひやんと説明するからとりあえず奥の部屋へ

父が無理やり母を押して私の寝ている部屋へと押してい。

さて、すんなりと納得してもうかるものがどうか・・・

「早く説明して頂けないかしら？」

かなりイライラしているのが声を聞いただけでわかる

「少し、落ち付けって・・・えっと説明して貰って良いかな？」

「はい、えーっと・・・簡単に言えば私は使い魔みたいなものです」

「使い魔・・・？」

母はよほど驚いたらしくポカーンと擬音が見えるかと思つほど驚いたようだ。

「はい、私はアダム・ロレンスによつて具現化されています。」

「具現化？使い魔な？召喚じやないのか？」

父にはある程度魔法に関する知識があるらしい。

「正確には、魔法によって生みだした幻影に対し実体化の魔法を掛けただけなので使い魔という表現は正しく無いですね。身代りと言つた方が正確でしょうか？」

「なるほど、通りで生きている気配が無い訳か」

「気配・・・か、確かに生きてる訳じゃないからそれで見分けられるだろうが・・・この父親結構強そうだ。」

「逆に聞きたいんですが、なんで私を捕まえたんですか？」

「いやなに、リデアの若い頃に似ていて気配が無いからね・・・刺客かと思つただけだよ。」

「刺客って・・・この親父は日頃何をしているんだらつか・・・

「つまり・・・貴方は私の娘という事で良いのかしら?」

母親は・・・話を理解してたのかわからん。

「良いんじゃないか?本人なら子守を任せても大丈夫だろう。」

「うわ、子育てを丸投げしあがつたよこの親父

「ふふふ、実は娘も欲しかったのよねー。それでお名前は?..」

名前か・・・

「名前はー・・ジヨン・スミスとか?」

ジョン・スミスって……我ながら適切である。

駄目だここいつ早く何とかしないと、と思つたかはわからないが父も母も何やら頭痛に耐えているようだ……そりやそりやうだわな。

「仕方ないわね、貴方はアメリカ・ロレンス私の遠縁といつ事にす
るわ。」

「それが一番だらうな。」

「それはもうとあなた、お仕事は?」

「いや、ほり・・・まあ、なんだアメリカを見つけて引っ張つて・・
・」

「お仕事は?」

「・・・行つてきまー」

うちでは、父より母の方が強いらしい。

そして、父はとまどと再度仕事に向かつたようだ。

「さて、アメリカ歓迎の為に今日は御馳走を作つましょ。子守を
よひしへね」

「はい、わかりました」

子守と言つても、自分の子守だからな。きっと大丈夫だと思いたい。

1.7 もうサブタイトルを付けないで数字だけで良いんじゃないかな的な何か

あれ・・・土日は休みだったはな・・・

1・8 十日はお休みですか的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1・8 十日はお休みです的な何か

流石に自分の子守はとても楽だった。なにせ何をすれば良いかが全てわかる訳だからな。

そして、数時間が経ち夕方

「ただいま」

父が帰つて來たようだ。

「「おかえりなさい」「

風呂なんて洒落たものは無いから帰宅後そのまま夕食である。

「今日は奮発して御馳走にしてみましたー」

「おお、御馳走だ」

「え？」

私と父のリアクションには天と地ほどの差があった。

夕食は、黒パンに、具が沢山入ったスープ、それと少々のハムという構成である。

「ふふふ、凄い御馳走でしょ？」

「そう・・・ですね」

現代日本の感覚を持つ私は返す言葉も無い。やつれと食べてしまつてしまふ。

そして、食後

「さて、今後の事についてだがアメリカはどうしたい?」

「えつと、冒険に出たいなと思つてます。魔法も使えますし···」

「うーん···なら学校に行つてみるのはどうだ?」

「学校?学校つてお金が掛るんじゃ···」

「一応、王立学園なら魔法が使えばお金は掛らないみたいだし、受けるだけ受け見て見たらどうだ?」

「あなた、その前に居住者として登録しないといんじゃない?」

「?」

「ああ、やつかやつかすると明日は居住者として登録してつこでに学園に關しても調べてるか。それでいいか?」

「あ、せこ···」

そうして夜は更けて行き、翌日に居住者登録(戸籍のようなもの)と学園の受験の手続きをする事になつたのである。

1・9 多分分かれ道になる話の前夜的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1・9 多分分かれ道になる話の前夜的な何か

そして、翌日である。

前日の夕食がいかに豪華だったのかがわかった。

朝食は黒パンと野菜スープ（塩末使用）だったのである。

まあ、いきなり聞くのも気が引けるから、他と比べてみてから聞く事にしよう。

特に問題も無く食事が終わり、予定通りに登録へ行く事になった。

「ちゅうちょつと名前を書くだけだから」

と言つのは父の表現であるが、登録自体は簡単らしい。

私は父に連れられて役所に向かつ、その道中に父が役所について簡単な説明をしてくれた。

役所といつのは複数のギルドや国の機関の窓口が集まつた合同庁舎のようなものらしい。

ただし、冒険者ギルドだけは国際機関（？）で単独であるらしい。

そんな話を聞いてるついで役所に着いたようだ。

役所の扉は開け放たれているためそのまま中に入つていぐ。

「居住者登録はここで良いのかい？」

「はい、居住者登録ですね？登録は・・・」

「登録はこいつで保証人は俺だ」

「それではこちらの用紙に必要事項を記入ください。それとカードの提示をお願いします。」

父が受付と話している間に私は用紙を記入することにした。

名前・・アメリア・ロレンス

年齢・・15歳

性別・・女

居住・・保証人に同じ

こんなものだね？

書いたものを父に渡すと保証人の欄に名前を書きそのまま窓口へ出す。

そして、待つこと数分

「お待たせしました、こちらが登録カードになります。内容を確認頂いて記載内容に間違いがなければ、捺印をお願いします。」

特に問題が無さそうなので捺印する。

簡単な説明を受けたが、どうやらこのカードは汎用で色々な機能があるとの事だ。

機能の追加は各ギルドで出来るから追加した時に詳細説明を聞けといつ事らしい。

「せういえば、学園の試験に関してはここで確認できるのか？」

「確認出来ますが、多分直接学園に行つて確認した方が早いですよ。」

「

「やつぱりそつか・・・なら直接行く事にするよ。」

「あ、学園に行かれるなら紹介状をお書きしますね。」

そうして、紹介状を手に入れ王立学園へ向かつて行なった。

1・9 紛糾がれ道になる話の前夜的な何か（後書き）

どのまゝに進めるか悩む今日この頃

学者か冒険者、あるいは他の進路か・・・

1・10 2・0になんて為らない的な何か

王立学園では何事も無く受験要項を聞くことが出来た。

入学試験は小論文と魔法の実技によって行われるらしい。

まあ、勉強に専してはどうするかは今後の課題にしよう・・・私は気が付いてしまった

魔力が足りない

イメージが魔法であるといつこの世界では魔力が足りないというのはおかしいと思うだらう。

通常の魔法はよくわからない何かを消費して魔法を発動するという『一般的なイメージ』の元に構成されている。

そして、この世界では訳のわからない何かが魔力として定義されている。

一般的なイメージがあるといつのは例えるならば道を歩くようなもので、何も無い状態の荒野をあるく（自力で魔法を起動する）よりは圧倒的に楽なのだ。

そして私も面倒だから一般的な魔法を使い『今の体』を構成している。

一般的な法則に従つて構成している以上、魔力が無くなれば他から持つてくるか一旦解除して回復を待たねばならないのだ。

(どうしようか・・・)

私は『とつあえず』空間に漂う魔力を吸収する事にして、問題を先伸ばしきることにした。

1・10 2・0になんて為らない的な何か（後書き）

とつあえずこれで・・おめで

1・1・1 そつだ樹海へ行こう的な何か。

「……といつ事で俺は仕事に行くから

「え？」

のこり魔力の事を気にしてこじりついで父が話していたのを聞き逃したらしい。

「ほり、俺は仕事に行かなきゃいけないからアメリカはビリするへつて話だよ」

「えーっと……私はちょっと散歩でもして帰ります

魔力が満ちてる場所を探さないといけないからね。

「そりゃ、じゃあ夕飯までには帰るんだぞ」

父はそつまつと中央に向けて歩いて行ってしまった。

それで良いんだろうか……？

まあ、考へても仕方ないしどうあえず、街の外に出る事にしよう。

昨日とは違いますんなりと外に出る事が出来た。

まあ、父が居ないなら当然か。

とりあえず・・・冒険者でも捕まえてこの辺の地理を聞くか？

ああ、そんな事する前に魔法で周辺のマップが見れるんじゃないかな？

試してみるか・・・『周辺探索』

おお、見れる、見れるぞ！縮小縮小つと・・・

どうやら東の方が魔力が濃そうだな行ってみよう。

『飛行』

まあ、飛べばすぐに着くでしょう

飛んで行つたらそこは火山でした。

火山の麓に小さな都市があつたのでとりあえずそこに行つて情報収集をしよう。

街の手前で飛行を解除し歩いて向かう。

帝都の外郭都市のあるからか城壁と城門はそれなりに立派だった。

有事の時は最終防衛ラインになるのだろうから当然といえば当然の

事であるが。

情報収集は・・・まず冒険者ギルドへ行こう。

そして探す事十数分意外と簡単に見つける事が出来た。

そういうえば、帝都では冒険者ギルドに行かなかつたから初の冒険者ギルド行きという事になる。

1・1・1 そつだ樹海へ行こう的な何か。（後書き）

展開が無茶苦茶になつたある今日この頃

1・12 早くもネタ切れ的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1・12 早くもネタ切れ的何か

「さあさあわくわくしながら扉を開くと内には・・・

ただの受付だつた

イメージ的には銀行を木造で作った感じだらうか?

入つてすぐの所に受付があり、奥へいくの受付で各窓口に振り分け
ていくのだらう。

窓口にはそれぞれ衝立のようなものがあり、一応プライバシー(?)
が保たれてるところだらうか?

とりあえず受付に行つてみよつ。

「本日はまだいつた御用件でしょうか?」

「登録したいんですけど

「えーっと・・・ありますね3番窓口へビーブ

3番窓口ね・・・

「新規登録ですね?居住証明はお持ちでしょつか?」

「あ、はい」

今日取つたばかりの証明書を渡す。

「では、登録の説明をさせていただきます」

まあ、面倒なので要約しよう。

冒険者登録は2種類あるらしい。

具体的には本格的に冒険者をやる人向けの1種と、副業として冒険者をする2種で、1種は各種特典を受けられるがノルマが決められているが、2種はノルマが無い代わりに特典が無いらしい。

とこりの事で私はとりあえず2種にすることにした。

「では、登録しますので少々おまち下さー。その間にこの書類をお読みになってサインをお願いします。あと、こりのギルドの制度に関しての冊子をお渡ししますので田を通しておこして下さー。」

と、書類を渡される

内容は・・・よくありがちな問題があつたら自己責任で解決する」と云々・・・とありますサインしました。

そして冊子の方を読むと、仕事の斡旋とランクに関して主に書いてあり、おまけ程度に本部支部の扱いなどが書いてあるだけのようだ。

こちらも要約すると、仕事は各内容毎にポイントが振られており、ポイントの多さがギルドに対する貢献度を表す（これは主に1種のノルマに関連するものらしい）また、それとは別に各人の能力に対してのランク付けがされており、このランクによって受けられる仕

事の難易度が変わるようだ。

「それでは、登録の方が終わりましたので居住者証明の方をお返しします。アメリカさんの前途に幸があおからん事を・・・」

さて、登録も終わったよつだし、張り切つて魔力の回収に行きますか！

1・13 結構無茶な展開だと思いつつ無理矢理書いた的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1・13 結構無茶な展開だと思いつつ無理矢理書いた的な何か

ギルドに登録出来たので予定通り魔力の強い所へ行ってみよ。

確か山の辺りが濃かつたから山へ向かってみよ。

山のふもとに辿り着くと洞窟と小屋があつた。

そして道中結構な冒険者らしき人とすれ違う・・・「ここに何かあるのだろうか?

とりあえず、小屋の前に立つてゐる人に聞いてみると

「あの、すみません。」

「どうしたお嬢ちゃん道にでも迷つたのか?『マイズの街なら』から南東の方に・・・」

「いえ、そういうなくて」

「なら帝都かい?帝都なら』から東

「そういう訳で、『』は何なんですか?」

「なんなんですかって・・・ああ、『』はダンジョンだ」

「ダンジョン?」

「ああ、迷宮とこいつ呼ばれ方もするがな、一応ここはドリゴンが守護するダンジョンって事で有名だ。まあ、ドリゴンと言つても意志疎通が出来るからそれほど危険な存在じやないがな」

意思疎通?会話でも出来るんだろつか?でもそもそも・・・

「ドランヒー・・・」

「ん?ドランを観たいのかい?」

「じゅらかと並ば・・・見たいですけど・・・」

「せうかそうか、ちょっと待つてな」

と黙つて向やら小屋の中に入つていく男

待つ事数分

「待たせたな、じゃあちよつぐら見に行こうか

・・・仕方なしごこへ事にしよう

移動中に男が簡単にドランヒーについて説明してくれた

あつきたりではあるが、地上最強の生物であるとこいつ事しかわからぬ

あと珍しかったのは移動中にモンスターが出現した時である。

「おひと」

男が急に立ち止まる

田の前には狼のようなモンスターが2体

「讓ちゃんちょっと下がってな」

私の前に田隠しをするように立ち何やら呪文を唱えている・・すると

狼のようなモンスターが光を放ち消えてしまった。

「え? いま何が・・・」

「なに、邪魔だったからちょっと隣の通路に飛ばしてやつただけさ」

どうやら、強制的に移転させたらしい・・・もしかしてこれは色々と使えるんじゃないだろうか? 暫がある時にでも研究してみようと思つただけで終わつた。

それ以外は特に何事も無く進み大きな扉の前へ辿り着いた。

1・13 結構無茶な展開だと思いつつ無理矢理書いた的な何か（後書き）

アイディアはあるんです。ただ文章に出来ないだけなんです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248z/>

転生、そして・・・

2011年12月27日21時12分発行